

一

次の―線部①～⑧のカタカナの部分に漢字で、⑨・⑩の漢字の部分にひらがなで書きなさい。

いずれも一画一画をていねいに書くこと。

もうすぐプレゼントがトドク。

ジャッカンの不安が残る。

文化人類学をセンモンとする。

この庭園はフセイがある。

結婚式でシユクジを述べる。

今になって思えばガテンがいく。

患者に被害を及ぼす医療カゴは、あつてはならない。

意味シンチヨウな笑みを浮かべる。

命令に背反する。

自身のふるまいを省みる。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

歩がこの土地を訪れたのは、未だ早朝には霜が降りる春先のことだった。商社勤めの父は転勤が多く、一家は列島を北上するように引越しを繰り返していた。そして東京での生活が一年半ほど続いたところで、再び転勤の内示が出た。今度は遙か北地の平川に勤めるといふ。歩はその地名を聞いて首を傾げた。地理は得意だが、聞いたことがない。津軽地方の幾つかの町や村が合併して、新しくできたばかりの市なのだといふ。父の役職から考えると、次期は東京本社で管理職として勤める可能性が高い。管理職への昇進前に、僻地へ飛ばされるのは社の慣例だといふ。単身赴任をする案もあったが、結局一家はこの土地へと越してきた。父の親戚が、平川からそう遠くない土地に空き家を所有していたのだ。父は一軒家に憧れがあった。歩は二階の自分の部屋と、芝生の庭に憧れがあった。その親戚は、電話口で父に言ったという。

——人が住まない家はすぐ駄目になる、ぜひ使って欲しい、死んだ親父とお袋も喜ぶだろう。

平川より更に北、山間に広がる集落の、東の高台に家があった。玄関の磨硝子の引戸を開けると、冷やかな木材の匂いがした。六畳の居室が三つ並び、その三つ目の部屋の隣に仏間がある。そこが仏間と分かるのは、角の一枚の畳が、ちょうど仏壇の形に褪せていたからだ。二階にもほぼ同じだけの広さがある。家族三人で住むには、些か広すぎる家だった。二階の東側の六畳間が、歩の自室になった。日当たりが良くて過ごしやすいでしょうと、母が決めた。越してきた翌日、その部屋に、学習デスク、スライド式の本棚、ライトブラウンのロフトベッドなどが、業者によって運び込まれた。Aの部屋に、自分の慣れ親しんだ家具が並べられていく。数週が過ぎれば、家具は部屋に馴染み、そしてここは自分の部屋になるだろうと思った。

父は一足先に、この土地へ越してきていた。歩の転入学は学年変わりの時期がいいだろうと、一ヶ月ほど単身赴任の形を取っていたのだ。その父に連れられて、坂を下った先の川沿いにあるという公衆銭湯を訪れた。歩いて五分の距離で、入浴料も安い。銭湯に番台の姿はなく、入口に「入浴料百円」と記された木箱が置いてあった。父がその木箱に百円玉を二枚入れると、箱の中で小銭の音が響いた。タオルを片手に磨硝子の戸を開けると、湯煙の漂う浴槽には、二人の先客の姿があった。歩と同じ年頃の少年が一人、五歳ほどの男児の姿が一人。歩と父が浴槽へ浸かると、少年は気を使ったのか風呂から上がった。少し遅れて、男児も少年を追うように、風呂場から出た。

銭湯からの帰りがけ、歩は珈琲牛乳を飲みながら、火照った顔で河を眺めた。父は隣で、やはり火照った顔で、フルーツ牛乳など飲んでいた。河辺は鉄柵で区切られており、柵の向こうは五メートル程の護岸壁になっている。河はその護岸の底を流れる。対岸は急峻な山の斜面と繋がっており、谷底を流れる河にも見える。山の落葉樹は、裸の梢に萌黄色の葉を僅かにつけたばかりで、未だ隙間が目立っていた。夏になれば、この山は緑の堆積を増すだろう。

河面の所々では、巨大な岩石が顔を出していた。岩石の周囲で、水は流れたり滞ったりしている。せせらぎはそこから響いてくる。歩はふと、さきほど湯船に見た少年を思い出した。彼が中学三年生ならば、数日後には学校の教室で顔を合わせることになる。

「お父さんはもう、職場に新しい友達はできた？」

歩が訊くと、父はなぜかくすくすと笑い、

「大人になるとね、友達になるとか、ならないとか、そういう関係じゃなくなってくるんだよ。」

「それって寂しい？」

すると今度は困ったような微笑みを浮かべた後に、首を傾げて見せた。ときに母が見せる仕草に似ていた。父はフルーツ牛乳を一息に飲み干した後に、

「歩も新しい学校に、早く馴染めるといいな。」

歩にとっては、三度目の新しい中学校だった。

始業式の朝、歩は時計が鳴る一時間も前に目を覚ました。もう一度、頭を枕へのせてみるが、意識が醒めている。

B 平原には斑に緑色の野草が生え、斑に褐色の崩れた落葉が残り、そのどちらにも均等に霜が降りていた。白い息を吐きながら、その絨毯模様の平原を歩いた。途中、菜の花に似た黄色い花群を見つけた。しかし近づいてみると、菜の花とは葉の形が明らかに違う。掌ほどの大きな葉が放射状に垂れ、茎の根元では白い球体が土壌から顔を出している。どうやら蕪の花らしい。畑の主の死後も、そこで自生しているのだ。

蕪の花の向こうに、集落一帯を一望にできた。前方に標高五百ほどの黒い山が聳え、その山裾を南西に向かって河が流れる。銭湯からの帰路に、父と眺めた河だ。その河辺に、五十世帯余りが点在している。山間に溜まる朝霧の中に、瓦屋根の民家、三角屋根の銭湯、トタン屋根の燃料店、半壊した納屋、ブルーシートを被せた小屋、骨組みだけのビルハウス、用途不明の煙突、杉にボルトを打った電信柱、廃校になった学校の校舎などが、朧気に浮かぶ。霧の中から鶏鳴が響く。東の稜線から黄金色の朝日が射し、集落一帯をあまねく照らし始める。すると霧が引いていく。薄闇が剥がされ、日光による確かな影が、煙突や電柱から伸びていく。

陽光のせい、歩き回ったせい、身体が熱くなり、歩は外套のボタンを外した。深呼吸をすると、透き通る冷やかな大気が、鼻腔を抜ける。この大気の下では、稲も、野菜も、果物も、動物も、鳥も、昆虫も、健康に育つかもされない。歩は朝日に眩い銀色の霜を踏み砕きながら、畑の跡地から引き返した。と、台所の磨硝子の向こうに、明かりが灯っていることに気づく。換気扇のシャッターが開いている。母が朝食の支度を始めたらしい。

始業式後の学級会で、歩は皆の前に立った。担任の室谷という男性教師が、黒板に歩の氏名を記し、通り一遍の紹介をする。この地域では珍しい転校生に、皆は好奇の瞳で歩を見た。教室には十二人の男女が座っており、それはこの中学に在籍する三年生の全生徒だった。学級会後の休み時間、歩は一人の少年に話しかけられた。あの公衆銭湯の湯船に見た顔だった。切れ長の一重瞼の目、形の良い鼻梁、薄い唇——、制服を着て、頭髪を整えた姿だと、随分と大人びて見えた。なんでも彼は彼で、噂に聞いていた転校生だと気づいていたという。

そこへ出席簿を小脇に抱えた教師がやってきて、お、もう友達が出来たのか、にこやかに言う。少年が経緯を説明する。そういえば兎と歩は、同じ地域に住んでいるんだってな、じゃあ、兎が学校内を案内してやれよ、そう言い残して教師は教室を出ていった。二人は顔を見合わせた。せば、案内してやっ

か、そう言つて、晃は歩を教室から連れ出した。晃は殆ど初対面の歩に対して、戯けて見せることも、愛想笑いをするものもない。しかし無愛想でもなく、ただはつきりものを言う。晃は学級の中心的人物だと直感した。転校を繰り返したせいも、歩は学級の力関係を把握することに長けていた。

(中略)

校庭の桜がぼつりぼつりと咲き始めた頃、学級では三学年の担当委員決めが行われた。歩はこれまで通り、図書委員が美化委員をするつもりだった。最初に学級委員長の立候補を募ったが、挙手はない。室谷先生の指示で、話し合いで委員長を決めることになる。二学年時は委員長も副委員長も女子が担ったので、三学年は男子がやるべきだと女子グループは主張した。話し合ひは、男子六人の中から誰を委員長にするか、という方向へ流れていく。途中で再び立候補を募るが、やはり挙手はない。藤間が、せばアミダグジで決めるべ、と言いだしたが、運ではなく議論で決める、と教師に叱責される。

歩にはこれらのやり取りが、全くの無意味に見えた。男子六人の中からリーダーを決めるならば、晃以外に考えられない。そして本当は、誰もがそのことを分かっている。途中、話し合ひを終始見ているた歩も、意見を求められる。それで仕方なく、皆が思っていることを代弁した。

「僕は晃君が委員長をやるべきだと思ふけれど。」

「なしてそう思う？」

「すぐさま鋭い口調で晃に問われ、歩は戸惑ったが、思っている通りのことを口にした。

「僕達六人で何かをするとき、君がいつも率先して物事を決め、行動に移すだろう。同じことを学級でやればいいだけだし、逆に同じことは、君にしかできないよ。」

それを聞くと、晃にしては珍しくどこか慌てた様子で、歩から視線を逸らし、やや紅潮した自身の頬を手の平で撫でた。そこへ教師がやってきて、

「どうだ、東京から来た新しい仲間が、おまえを推薦しているわけだし、委員長をやってみたらどうだ。」

すると晃もようやく観念した様子で、せば俺が委員長さなります、と立候補をした。皆から拍手が上がり、歩も一緒になって手を叩く。歩にしてみれば、それは至極当然の成り行きだった。が、この後の学級委員長の宣言で、歩はびくりと背中を震わせることになる。

「三学年の委員長は務めます。この学校で委員長は務めるのは二度目です。学級がまとまるよう、精一杯頑張りたいと思います。副委員長には、歩君が推薦します。彼は東京で過ごしてたはんで、俺達にはない、新しい知識や、考えが持つてらと思ひます。ぜひ副委員長として、自分を補佐して欲しいと思ひます。」

返答を待つ間もなく学級には盛大な拍手が起り、歩の図書委員になるという目論見は、その拍手に打ち消されていった。

夕食時、学校で副委員長になったことを告げると、父母は目を丸くしていた。あゆが自分で立候補をしたの、母に訊かれ、友達に推薦されたのだと答える。すると二人は余計に驚いていた。

「こりや、明日は赤飯を炊かないとな。」

副委員長を務めることと、赤飯がどう繋がるのかは分からないが、父はその後、随分と早いペースでビールを啜りながら、

「しかし少人数の学級は、皆に役割が与えられる点は良いのかもな。マンモス校だと、殆どがその他大勢になってしまうものな。」

父は郊外の新興住宅地で育ち、かつ子供が多い世代だった。中学校は一学年十クラスにも及び、全校生徒は千人を超えたという。確かにそれだけの人数がいたら、その他大勢になる生徒が殆どだろう。しかし第三は第三で、解体寸前の学校だった。三学年はかろうじて学級になっているが、二学年と一学年は複式学級で、仮にこの学校が存続しても、次年度に進学してくる生徒は三人にも満たないと言われている。教員も確保できず、複数教科を掛け持ちしている教師も多い。やはり統合されて然るべき学校だった。

翌日から、副委員長の仕事が始まった。集会時に点呼をする、給食時にいただきますの挨拶をする、学級会で書記をする、その程度だった。浜松の中学で担った飼育委員より、よっぽど楽だった。あのときは夏休みも分担で登校し、炎天下の下、鶏小屋や兎小屋の清掃や餌やりをしたのだった。移動教室の際には、晃と並んで列の先頭に立つ。この学校で背の順に並ぶならば、歩、内田、稔、近野、晃、藤間、の順番で、いずれにせよ自分は先頭だった。しかし今は、副委員長という役割の為に、皆の先頭に立つて歩く。それは図書委員や、美化委員では得られなかった、小さな満足を、歩の中にもたらした。父が赤飯を炊こうと言ったのも、分かる気がしてきた。息子が少し成長したように、感じたのかもしれない。

学級会では、教室内に置かれた議題箱に投稿のあった内容について話し合う。朝の挨拶について、掃除の仕方について、授業中の私語について。多数決ではなく、話し合ひで決めるというのが、教師の方針で、唯一の指示でもあった。議論が煮詰まると、おめはどう思う、としばしば晃に意見を求められた。この際の歩の発言は、やがて辿り着く学級全体の答えの下敷きになることが多かった。晃は感心していたが、これには理由があった。歩は書記でもあったので、皆の考えを要約して黒板に板書していたゆえ、議論がどういふ方向へ流れているのか把握しやすかった。何も特別なことではない。このことを晃に言うと、それは特別なことだと答えた。同じことは、稔にやらせてもできねえだろう。稔はそれを聞くと、やはり気弱そうな眉を寄せるのだった。

学級会の間、室谷先生は殆ど何もせず、発言もせず、窓側の自身の椅子に座って、皆の議論を眺めていた。いつもクリーム色のニットベストを着た、三十代後半の教師——、後になって知ったが、彼は昨年度に県東の別の市から、第三に赴任したという。矢中先生には他国のスパイが来たと擲擻されたけど、と彼は笑っていた。過去にこの地方は、東西で違う藩に分かれていたという。西側の津軽藩が裏切った経緯もあり、未だ相手側の土地の人に敵愾心を持つ者もいるらしい。歩にしてみると、よく分からない考え方だった。何百年も前の事柄なのだし、同じ県民同士、仲良くすればいい。

学級会後の休み時間に、先生は話し合ひに参加しないんですか、と尋ねてみたことがある。すると室谷先生は窓から射す陽差しの中で、殆ど癖と思われような柔和な笑みを浮かべて、

「学級会の成功はね、僕の出番がないことだからね。」

放課後に男子六人で行動する際も、晃が意見を出し、歩が助言をして、六人の小さな集団が動いていく。あるとき晃と歩のやり取りを見ていた内田は、左大臣、左大臣と手を叩いてはしゃいだ。歩はその渾名が別に嫌ではなかったが、内田は晃に睨まれて肩を竦めた。いずれにせよ、東京の区立中学と同じように、あるいは浜松の市立中学と同じように、歩はこの第三中学でも学級に馴染むことができた。この頃になると、二階の自室の、学習デスクも、スライド式の本棚も、ライトブラウンのロフトベッドも、いつの間にか日当たりのいい六畳間に馴染んでいた。他人の部屋は、歩の部屋になっていた。オーク材の檜田テーブルも、最初からそこにあつたように居室に馴染み、冷ややかな木材の匂いは、一家の生活の匂いになつた。

ある日の下校時、大量の苗を載せた田植機が迷うことなく田圃の泥の中へ突入していく様を見て、自転車を停めた。田植機は畦道と平行して進み、泥土の中には五列の黄緑色の点線が描かれていく。その点線のあまりの正確さに、歩は数学の図形を想像した。あの規則正しく整列した稲が、成長し、やがて撓わに穂を実らせる。始業式の日の早朝の、澄み通る大気が鼻腔を抜けていく感じを想起しながら思う。同じ空気の中にいるのだから、稲や、野菜や、果物や、動物や、鳥や、昆虫と同じように、自分達もまた健康に育つだろう。

(高橋弘希「送り火」による)

問一 A に入れるのにもっとも適切な語を「(中略)」の後の本文から漢字二字で抜き出して答えなさい。

問二 ——線部①「父はなぜかくすくと笑い」とありますが、これはなぜですか。その理由としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 新しい職場ですでに多くの友達を作っていることを知らない歩の質問がかわいらしかったから。
- イ 大人になると友達などできないということを理解していない歩の質問を愚かだと思ったから。
- ウ 大人の社会のことを知らず友達ができたかと無邪気に聞いてくる歩の発言が微笑ましかったから。
- エ 職場を移るたびに友達をうまく作れない自分に対する無神経な歩の発言を許そうと思ったから。

問三 B は、次のア～エの四つの文から構成されています。四つの文を正しい順番に並べか

- え、その順番を、解答用紙の形式に合わせて記号で答えなさい。
- ア 憧れだった二階の自室は持つことができた。
- イ 代わりに西側の丸太階段を登った先には、畑の跡地が広がっていた。
- ウ しかし家に芝生の庭はなかった。
- エ 仕方なく外套を羽織り、庭先を散歩した。

問四 ——線部②「男子六人の中からリーダーを決めるならば、晃以外に考えられない」とありますが、歩がこのように思ったのはなぜですか。その理由として適切なものを次のア～オの中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア 晃はすでに一度学級委員長を務めたことがあるから。
- イ 歩にはグループの力関係を見抜く観察力があつたから。
- ウ 歩は学級内の有力な人物に取り入ろうと考えていたから。
- エ 晃は男子グループで行動する時、常にリーダーシップを発揮しているから。
- オ 歩は、晃が男子だけではなく、女子たちからも厚く信頼されていることを感じていたから。

問五

——線部③「歩の図書委員になると目論見は、その拍手に打ち消されていった」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 歩は負担が軽そうなので図書委員になりたかったが、新しく転校してきた歩には自由に委員を決める権利は与えられず流れに身を任せるしかなかったということ。

イ 歩は自分の趣味を活かせる図書委員になりたいと思っていたが、委員長という面倒な仕事を押しつけられたと感じた晃の仕返しによってかなえられることはなかったということ。

ウ 歩は経験したことのある図書委員になりたいと思っていたが、晃やクラスの皆に推されて副委員長という責任ある役職を引き受けなければならなくなったということ。

エ 歩は表に出るのが苦手なので図書委員になりたかったが、負担の重い役割を歩に押しつけようというクラスの皆の圧力によってやむなくあきらめなければならなくなったということ。

問題は次のページへ続きます。

問六

——線部④「二人は余計に驚いていた」とありますが、この時の二人の気持ちとしてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 新しいクラスで副委員長になったというだけでも信じられないと思ったが、さらに短い期間で周りから信頼を得て推薦されたということがわかり、うれしく思った。

イ 慣れないクラスの中で副委員長を引き受けられることになったと聞いただけで不安を感じたのに、さらにその役職を周りから押しつけられたようだと思って、歩の立場を心配した。

ウ 消極的な歩が副委員長を引き受けると聞いてよいことだと思ったが、さらに少人数学級だからこのような役職を引き受けられるのだと気づき、運命を感じた。

エ 転校してすぐに副委員長になったということに違和感を抱いていたのに、さらに歩がクラスの生徒から推薦されたと言ったので、そんなはずはないと不審に思った。

問七

——線部⑤「学級会の成功はね、僕の順番がないことだからね」とありますが、室谷先生が考える「学級会のあるべき姿」を二十字以上二十五字以内で説明しなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

問八

——線部⑥、⑦の二か所では、表現が異なっています。これは歩の状況の変化から生じていると考えられます。それはどのような変化ですか。三十字以上四十字以内で説明しなさい（句読点・記号も一字に数えます）。

ある一行の文章の精度を少しばかり上げたからといって、それに対して誰が拍手をしてくれるわけでもありません。誰が「よくやった」と肩を叩いてくれるわけでもありません。自分一人で納得し、「うんうん」と黙って肯くだけです。本になったとき、その一行の文章の精度に注目してくれる人なんて、世間にはただの一人もいないかもしれません。小説を書くというのはそんな作業なのです。やたら手間がかかって、どこまでも辛気くさい仕事なのです。

世の中には一年くらいかけて、長いピンセットを使って、瓶の中で細密な船の模型を作る人がいます。小説を書くのは作業としてはそれに似ているかもしれませんが。僕は手先が不器用だし、とてもそこまで面倒なことはできませんが、それでも本質の部分では共通するところがあるかもしれないと思います。長編小説ともなれば、そのような細かい密室での仕事がある日も来る日も続きます。ほとんど果てしなく続きます。この手の作業がもともと性にあった人でないと、あるいはそれほど苦にしない人でないと、とても長く続けられるものではありません。

子供の頃何かの本で、^④富士山を見物に出かけた二人の男についての話を讀んだことがあります。二人ともそれまで富士山というものを目にしたこともありません。頭の良い方の男は富士山を麓のいくつかの角度から見ただけで、「ああ、富士山というのはこういうものなんだ。なるほど、こういうところが素晴らしいんだ」と納得してそのまま帰って行きます。とても効率がいい。話が早い。ところがあまり頭の良くない方の男は、そんなに簡単には富士山を理解できませんから、一人であとに残って、実際に自分の足で頂上まで登ってみます。そうするには時間もかかるし、手間もかかります。体力を消耗して、へとへとになります。そしてその末にようやく「そうか、これが富士山というものなのか」と思います。理解するというか、いちおう腑に落ちます。

小説家という種族は（少なくともその大半は）どちらかといえば後者の、つまり、こう言っただけですが、頭のあまり良くない男の側に属しています。実際に自分の足を使って頂上まで登ってみなければ、富士山がどんなものか理解できないタイプです。というか、それどころか、何度登ってみてもまだよくわからない、あるいは登れば登るほどますますわからなくなっていく、というのが小説家のネイチャーなのかもしれません。⑤これはもう「効率以前」の問題ですね。どう転んでも、頭の切れる人にはできそうにないことです。

だから小説家は、異業種の才人がある日ふらりとやってきて小説を書き、それが評論家や世間の人々の注目を浴び、ベストセラーになったとしても、さして驚きはしません。脅威を感じたりすることもありません。C 腹を立てたりもしません（と思います）。なぜならそのような人々が、小説を長期間にわたって書き続けるのは稀なケースであることを、小説家は承知しているからです。才人には才人のペースがあり、知識人には知識人のペースがあり、学者には学者のペースがあります。そしてそういう人たちのペースはおおたの場合、長いスパンをとってみれば、小説の執筆には向いていないみたいです。

もちろん職業的小説家の中にだって才人と呼ばれる人はいます。頭の切れる人もいます。ただ世間的

に頭が切れるというだけではなく、小説的にも頭の切れる人です。しかし僕の見るところ、^⑥そのような頭の切れだけでやっていける年月は——わかりやすく「小説家としての賞味期限」と言っていいたくありませんが——せいせい十年くらいのものではないでしょうか。それを過ぎれば、頭の切れに代わる、より大ぶりで永続的な資質が必要とされてきます。言い換えるなら、ある時点で「剃刀の切れ味」を「鉈の切れ味」に転換することが求められるのです。そして更には「鉈の切れ味」を「斧の切れ味」へと転換していくことが求められます。そのようないくつもの転換ポイントをうまく乗り越えられた人は、作家として一段階大柄になり、おそらく時代を超えて生き残っていきます。乗り越えられなかった人は多かれ少なかれ、途中で姿を消して——あるいは存在感を薄めて——いくことになります。あるいは頭の切れる人が落ち着くべき場所に、すんなりと落ち着いていきます。

そして小説家にとって「落ち着くべき場所にすんなり落ち着く」というのは、率直に言わせていただければ、「創造力が減退する」のとほとんど同義なのです。小説家はある種の魚と同じです。水中で常に前に向かって移動していなければ、死んでしまいます。

というわけで僕は、長い年月飽きもせず（というか）小説を書き続けている作家たちに対して——つまり僕の同僚たちに対して、ということになります——一様に敬意を抱いています。当然のことながら、彼らの書く作品のひとつひとつについては個人的な好き嫌いはあります。でもそれはそれとして、二十年、三十年にもわたって職業的小説家として活躍し続け、あるいは生き延び、それぞれに一定数の読者を獲得している人々には、小説家としての、何かしら優れた強い核のようなものが備わっているはずだと考えるからです。小説を書かずにはいられない内的なドライブ。長期間にわたる孤独な作業を支える強靱な忍耐力。それは小説家という職業人としての資質、資格、と言ってしまういいかもしれません。

小説をひとつ書くのはそれほどむずかしくない。優れた小説をひとつ書くのも、人によってはそれほどむずかしくない。簡単だとまでは言いませんが、できないことはありません。しかし小説をずっと書き続けるというのはずいぶんむずかしい。誰にもできることではない。そうするには、さつきも申し上げましたように、特別な資格のようなものが必要になってくるからです。それはおそらく「才能」とはちよつと別のところにあるものでしょう。

じゃあ、その資格があるかどうか、それを見分けるにはどうすればいいか？ 答えはただひとつ、実際に水に放り込んでみて、浮かぶか沈むかで見定めるしかありません。乱暴な言い方ですが、まあ人生というのは本来そういう風にできているみたいです。それにだいたい小説なんか書かなくても（あるいはむしろ書かないでいる方が）、人生は聡明に有効に生きられます。それでも書きたい、書かすには一人の作家として、心を開いて歓迎します。

⑦ リングによるこそ。

（村上春樹『職業としての小説家』による）

問一 A、B、C に入れるのにもっとも適切な語を次のア～エの中から一つ

選び、記号で答えなさい。ただし、同じ選択肢を二度以上選んではいけません。

- ア しかし
- イ だから
- ウ ところで
- エ ましてや

問二 線部①、②の表現の、文中における意味としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ

つ選び、記号で答えなさい。

- ① 強弁している
- ア 大きな声で叫んでいる。
- イ 堅苦しく話している。
- ウ こわごとと述べている。
- エ 無理に言い張っている。

② 辛気くさい

- ア 受け入れがたい。
- イ 気が滅入る。
- ウ 他人に敵しい。
- エ 雰囲気が悪い。

問三 線部①「知性や教養や知識」とありますが、ここではどのようなものとして位置づけられていますか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 個々の生き方に豊かさを与え、充実した人生を送る手助けをしてくれるもの。
- イ 小説家として人気を保ち長い年月を生き抜いていく手助けをしてくれるもの。
- ウ 論理的な思考によってものごとの性質を言葉にする手助けをしてくれるもの。
- エ 物語が持つゆつくりしたスピード感に合わせていく手助けをしてくれるもの。

問四 線部②「頭の回転の速い人々、聡明な人々」——その多くは異業種の人々ですが——小説を

ひとつかふたつ書き、そのままどこかに移動していった」とありますが、それはなぜですか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「頭の回転の速い人々、聡明な人々」は、もともと小説の執筆を人生の一つのステップとしてしか考えていないから。
- イ 「頭の回転の速い人々、聡明な人々」は、小説という表現形式では自身の述べたいことが端的に伝わらないことに気付いたから。
- ウ 「頭の回転の速い人々、聡明な人々」は、自分が、完成度の高い、才気ある小説を書き続けることができるという自信がないから。
- エ 「頭の回転の速い人々、聡明な人々」は、言いたいことを小説で「置き換え」するより異業種で「置き換え」するほうが効率的だと思ったから。

問五 線部③「小説を書くというのは、とにかく実に効率の悪い作業なのです」とありますが、小説家が「実に効率の悪い作業」に向き合うのはなぜですか。三十以上四十字以内で答えなさい。(句読点・記号も一字に数えます)。

問六 線部④「富士山を見物に出かけた二人の男」とありますが、ここでは「二人の男」はどのような人物として描かれていますか。次の《説明文》の I、II に入れるのに適切な表現を自分で考え、I は五字以上十字以内で、II は十字以上十五字以内で答えなさい。(句読点・記号も一字に数えます)。

《説明文》

「頭の良い方の男」は、物事を I 人物として描かれている。一方、「あまり頭の良くない方の男」は、物事を II ことを大切にしている人物として描かれている。

問七 — 線部⑤「これはもう『効率以前』の問題ですね」とありますが、この表現から読み取れることはどのようなことですか。その説明としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 小説家は、明確な答えにたどりつける「頭の切れる人」とは本質的に異なり、明確な答えを必ずしも求めない存在である、ということ。
- イ 小説家は、どのような職種でも自身を適応させられる「頭の切れる人」とは違い、自身を適応させることを決然と拒んでいる、ということ。
- ウ 小説家は、無駄なく考察する能力を持ち合わせた「頭の切れる人」のように仕事をこなすことをめざしているが、全く足元にも及ばない、ということ。
- エ 小説家は、自身の表現の完成度ばかり興味を抱いており、「頭の切れる人」のように伝える内容まで考えることができないので比較にならない、ということ。

問八 — 線部⑥「そのような頭の切れだけでやっていける年月は——わかりやすく『小説家としての賞味期限』と言っているかもしれませんが——せいぜい十年くらいのものではないでしょうか」とありますが、それはなぜですか。その説明として適切でないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 頭の切れしか持ち合わせない人は、何年も時間を費やしながら粘り強く根源的なテーマについて考察と表現を繰り返しつつ自身にとつての新境地を切りひらくことができなから。
- イ 頭の切れしか持ち合わせない人は、小説家という職業の人間として、小説を執筆し続けようとする動機や、長期間孤独に表現を模索する持続力を持ち合わせていないから。
- ウ 頭の切れしか持ち合わせない人は、個人的なテーマをそのままのかたちで表現できる異業種に魅力を感じるようになり、小説という表現形式に興味をおぼえなくなるから。
- エ 頭の切れしか持ち合わせない人は、表現の表面的な切れ味の鋭さに依存するあまり、読者に飽きられることを恐れ個人的なテーマを追求し続けることができないから。

問九 — 線部⑦「リングにようこそ」とありますが、どういことですか。本文全体の論旨を踏まえつつ説明している文としてもっとも適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 小説家として生き残るためにはライバルに負けない強靱な忍耐力が必要であり、つねにライバルと戦い続けることが必要である。小説家になりたいと思うのなら、根気よく戦い続ける強い覚悟を持ったうえで挑戦してほしい、ということ。
- イ 小説を書くという営みは頭の回転の速い人には長続きしづらく、異業種に興味のない人が取り組むべき表現分野である。小説家の世界は、効率ばかり追い求める世俗とは異質の、温かみのある世界であり、安心して小説の執筆に挑戦してほしい、ということ。
- ウ 小説を執筆し続けるためには小説家としての優れた核のようなものが必要であり、誰もが小説家でいられるわけではない。その資質の有無は確かめてみるしかなく、小説を書く強い動機と生き残れる自信があるならば、挑戦してほしい、ということ。
- エ 小説家は経験を積むことを重視するタイプの人間であり、実際に多くの小説家が多様な経験を積んできた。小説家を志望する人は、孤独な執筆作業に耐え経験を重ねつつ、同僚の小説家と支え合いながら積極的に小説の執筆に挑戦してほしい、ということ。

(以下余白)

国語解答用紙

受験番号

氏名

※注意 解答欄は設問の順序通りにはなっていないところがありますので、まちがえないこと。

↓ここにシールをはってください↓

一

⑨	⑤	①
		く
⑩	⑥	②
みる		
	⑦	③
	⑧	④

二

問一

問二

問三

↓
↓
↓

問四

問五

問六

問七

25

問八

30

三

問一 A

問二 B

問三 C

問二

①

②

問三

問四

問七

問八

問九

問五

30

40

問六

I

5

10

II

10

15

